

おぶせくらし図鑑

工藤陽輔さん

静岡県出身で、現在は小布施町で土作りにこだわった野菜や果樹を栽培する農家の工藤陽輔さん。移住と就農のきっかけは、小布施町で農業に取り組んでいた大学時代の友人・鈴木宏道さんに病が見つかり、手伝おうと思ったことでした。そんな工藤さんが就農に至った経緯や、現在の取り組み、町の暮らしの様子をお聞きしました。



「まずは工藤さんと鈴木さんの出会いを教えてください。」

私は静岡県出身で、大学は愛知県の豊橋科学技術大学に進学し、触媒化学を専攻していました。部活はラグビー部に所属。その仲間の一人として出会ったのが、小布施町出身の鈴木さんです。彼の専攻は微生物工学や遺伝子工学で、私とは研究分野が違いましたが、ラグビーのポジションがお互いにバックスで近かったこともあり、大学院までの6年間、自主練習を共にするなど、互いに切磋琢磨していました。

「工藤さんが小布施町に来たきっかけは？」

大学院修了後、彼は博士過程に進んで微生物工学の博士号を取得し、大学で研究員を務めていました。私は静岡県掛川市にある自動車の排ガスを浄化する触媒メーカーに就職しました。そのような中、私の家族が体調不良になり、食に気をつけるようになったことで、私も食に関心を抱くようになりました。同じ頃、彼にガンが見つかりました。同じ頃、彼にガンが見つかりました。27〜28歳の頃でした。

当時、彼は研究者の道を歩き始めたばかりでしたが、悩んだ末、地元の小布施町に戻って、微生物農法（農業や



肥料の使用を抑え、土壌を微生物の生息しやすい環境にととのえる農法）を取り入れた農業を始めました。もともと彼の祖父が有機農家で、かつて祖父から有機農業を学んだこともあったそうです。そんな彼が私に送ってくれる農作物がおいしくて、彼を応援したい気持ちもあり、ゴールデンウィークの休暇を利用して手伝いに来たのが、最初に小布施町に来たきっかけでした。町自体は「観光地であり、農業の町でもあるんだな」という印象でした。

「鈴木さんの微生物農法はどのようなものだったのでしょうか？」

彼は静岡県の自然食品の会社・株式

彼の反応は直接聞いたことはありませんが、多分、嬉しかったと思います。

「農業はどうやって覚えたのでしょうか？」

移住した翌年の2015年に、町の新規就農里親研修の制度を使って新規就農しました。研修期間は2年間。彼の両親に里親になってもらい、彼の父から与えてもらった畑で野菜を栽培し、彼の果樹栽培も手伝いました。私が果樹ではなく野菜農家を選んだのは、もともと野菜が好きだったこと、野菜は生きていく上で必需品であり、自給できることは大きな武器になると思ったからです。

野菜作りのノウハウは、彼の両親（里親）や彼から土作りを教えてもらいながら、全国の有機農家に足を運び勉強しました。いろいろな失敗を重ねながらも、収穫した野菜は研修期間中から彼の出荷先に発送させてもらったり、配送の窓口になってくれる方を紹介してもらい、個人のお客さんを中心に販路を開拓しました。彼は「研修後はお前が野菜を作り、俺が果物を栽培すればいいな」とイメージしていたようです。

ところが、研修2年目の2016年の夏、彼が亡くなってしまったのです。まさに桃の収穫を目前に控えた

「そうした農法から工藤さんも農業に興味を持つようになったのでしょうか？」

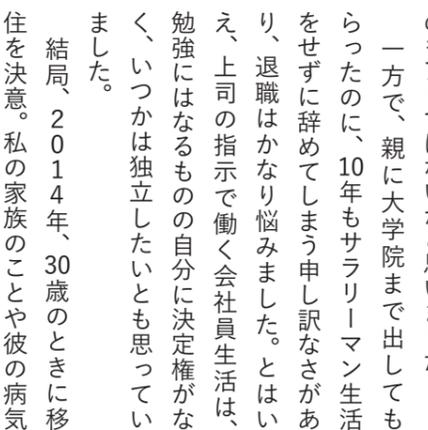
私自身は、彼のところに手伝いに来るまで農作業は全く未経験で、当時はまだ農業の面白さは分かっていませんでしたし、まさか自分が就農するとは思っていませんでした。それでも彼が作るおいしい農作物を私も育ててみたい気持ちかわき、食への意識が高まり、微生物農法をやってみたいと興味を持つようになりました。

「そこから移住につながった経緯は？」

一人で有機物農法によるりんごや桃などの果樹栽培をやっている彼の姿を見て、仲間がいたほうが良いのではないか、私が移住して一緒に農業をやりたいもアリではないかと思いました。

一方で、親に大学院まで出してもらったのに、10年もサラリーマン生活をせずに辞めてしまう申し訳なさがあり、退職はかなり悩みました。とはいえ、上司の指示で働く会社員生活は、勉強にはなるものの自分に決定権がなく、いつかは独立したいとも思っていました。

結局、2014年、30歳のときに移住を決意。私の家族のことや彼の病気を





きでした。彼は病院には行かず、亡くなる一週間前まで畑に出ているほど直前まで働いていたので、私はもちろん悲しかったのですが、収穫期を迎えた彼の桃をなんとか出荷しないといけません。悲嘆している余裕はありませんでした。ひとまず彼の出荷先を知っていた私が代わりに出荷することになったのですが、当時はまだ研修期間中。収穫や出荷の細かい流れが全くわからず、余裕のない状態で、気付いたら2016年の冬になっていました。

―そして2017年に独立就農されましたが、そのまま鈴木さんの畑を引き継いだのでしょうか？

手伝ってくれ、かなり助けられています。取引先の人が手伝ってくれることもあります。

それに、町内には同時期に新規就農した仲間もいますし、実際に隣の畑も新規就農者なので、近況報告や相談をし合っています。ほかに、町内の農業団体「おぶせファーマーズ」では、困ったときに質問や相談するとみんなが教えてくれるのでありがたいです。小布施町の規模感だからこそできる魅力です。

―町内での一人暮らしの苦労や、近所付き合いの大変さはありますか？

最初の4年間は町内のアパート暮らしで、今は紹介を受けた納屋付きの一軒家に住んでいます。納屋で出荷の荷造りをしている間にすぐにごはんを食べに行けるなど、かなり楽になりました。アパートのときは少し離れた共同スペースに納屋を借りていたので不便でした。

それに、アパート暮らしでは近所付き合いがほぼなかったのですが、今は地域の人が気にかけてくれると感じます。遠巻きに見守ってくれる人も多いですね。地区の行事に関しても、年2〜3回の草刈りは参加するなど、極力参加しています。

―近所さんとは農作物の交換なども

もともと私が与えられていた畑もあったので、彼の広い果樹畑の全ては引き継げなかったものの、半分を引き継ぎました。結果的に、自然な流れで野菜と果樹の両方を栽培することになりました。多品目栽培は効率が悪いのですが、とてもやりがいを感じています。

―発酵液「Meguru」の製造も引き継いだのですか？

今は私が引き継いで作っています。作り方は厳密にはきっちり教わったわけではなく、亡くなったあとに彼のノートを見て、「恵風」の社長と一緒に辿っていきました。そうした中で思ったのは、自分の畑の天然菌を使うことに意義があるということです。今は常に在庫を切らさないよう貯蔵し、市販だけでなく、個人販売もしています。

―それでは改めて、現在の農業の取り組みを教えてください。

野菜はエネルギーや栄養価が高く元氣の出るものを目指し、自分自身も食べたい野菜を種類豊富に栽培しています。彼の紹介で取引が始めたお客さんも多く、いまだに購入を続けてくださる方もいてありがたいです。果樹は、桃、りんご、プルーンを栽培し、米

ありますし、分からないことは聞け、ほどよい距離でお付き合いができています。



―移住前後のギャップはありますか？

居住地の違い以上に、仕事内容のギャップは感じます。会社員の頃は、会社を休んでも給料がもらえましたが、年金も会社が半額負担してくれていて、守られていたんだと強く感じます。今は自分がケガや病気をしても身体が動かなくなったら畑仕事ができなくなってしまう。会社員の安定は分かっていましたが、いざ、この立場になってみると、全て自己責任であるこ

も少し作っています。

出荷は基本的に直送で、「恵風」や長野市松代で有機野菜を取り扱う八百屋「カネマツ倶楽部」、ネットショップで健康食品やグッズを扱う「信州健康倶楽部」にも出荷しています。町内でも少し販売していますが、本来であればもっと地元で循環することが望ましいので、町内の流通を増やすことは課題です。

―農法のこだわりや工夫はありますか？

果樹は極力減農薬にし、野菜は農薬を使用せず栽培しています。ただ、就農当初は有機野菜ならおいしいと思っていました。今はきちんと愛情を持って育てることが大事だと思い、大切なのは生産者の意識だと思うようになりました。植物には人が思っていることが全部伝わると思うので、嘘はつきません。愛情を注ぎ、過保護にならないように気を付けています。私は子育てをしたことはありませんが、これは子育てにも通じると思います。

それと、果樹は植物本来の力を活かす切り上げ剪定(上向きの枝を伸ばす樹形)を導入し、年々少しずつ改良を重ねています。ただ、果樹は年一回しか成果が得られず、近年は毎年の天候

とを実感します。

ちなみに、当初反対していた父も、年に数回手伝いに来てくれ、関係は良好です。

それと、ギャップではないですが、研修1年目は大雪の年で、冬の寒さがきつかったです。畑の剪定を指示されたのですが、不慣れな作業で遅いので、積雪時やらないと間に合わない。研修中の身なので寒いと言っただけで、手が動かさず苦労しました。今では天気を見て好きなようにやれますが、寒いことは寒いです(笑)。

ただ、日々の買い物は町内にスーパーがあるので困りませんし、町内にもないものも、車さえあれば近隣市町村に買いに行けるので便利です。スマートICがあるので高速道路もすぐに乗れ、山際のエリアほど雪深くなく、町の移住や就農サポートもあり、役場との距離感も近く守られている感じがします。住みやすいところだと思います。

―それでは、今後の展望を教えてください。

就農して6年が経ちましたが、やっと何とか生活できる目処が立ちました。最初は無我夢中で、自分が儲かっているかどうかも分かっていなかったのですが、ようやく経理面もきちんと

の変化が大きく苦労があります。

―そうした中で農業のやりがいとは？

常においしいものを食べることができて幸せです。夏から秋は休みがほとんどありません(笑)。そのぶん、冬にゆっくりしたいと思っています。の、なんだかんだで冬も忙しい。それでも会社員時代に比べたら、天候などには振り回されるものの、自分で考えて自由にできる楽しさややりがいは大きなものがあります。

―一人で農業をやる苦労はありますか？

基本的には一人ですが、近所の人などいろいろな人が草取りや収穫などを



管理できるようになったところです。

そうした中で、3年前からは家庭菜園教室を開催しています。コロナ禍で自給自足に興味を持ち、畑はあるものの野菜の育て方が分からない人が意外と多く、町内の人から依頼をされたことがきっかけでした。私も興味があったので、きっかけをいただきありがたかったです。生徒はSNSの募集や口コミで集まり、今はだいたい毎月10名ほどが参加してくれます。

今後はこうした一次産業以外の幅広い部分で人の役に立てばいいなと思っています。もちろん生産はベースにしながらも、伝えることを意識しながら経営していきたいです。また、微生物農法を多くの方に使ってもらい、広めていきたいと思っています。(OBUSE Meguru lab.)

<https://harukodo.wixsite.com/keifu>

―最後に今後の移住者や就農者へメッセージを！

小布施町の農家の皆さんはとても親切で、分からないことがあれば、相談にも親身になって乗ってくれます。町との距離も近いので、意見なども言いやすい雰囲気です。「小布施」という名も全国区で、販売の面でも有利なので、移住しての就農はおすすめですよ。